

R. シュトラウス：アルプス交響曲 op.64

約50分

Richard Strauss: Eine Alpensinfonie, op.64

1. 夜 Nacht
2. 日の出 Sonnenaufgang
3. 登り道 Der Anstieg
4. 森への立ち入り Eintritt in den Wald
5. 小川に沿っての歩み Wanderung neben dem Bache
6. 滝 Am Wasserfall
7. 幻影 Erscheinung
8. 花咲く草原 Auf blumigen Wiesen
9. 山の牧場 Auf der Alm
10. 林で道に迷う Durch Dickicht und Gestrüpp auf Irrwegen
11. 氷河 Auf dem Gletscher
12. 危険な瞬間 Gefahrvolle Augenblicke
13. 頂上にて Auf dem Gipfel
14. 見えるもの Vision
15. 霧が立ちのぼる Nebel steigen auf
16. しだいに日がかげる Die Sonne verdüstert sich allmählich
17. 哀歌 Elegie
18. 嵐の前の静けさ Stille vor dem Sturm
19. 雷雨と嵐、下山 Gewitter und Sturm, Abstieg
20. 日没 Sonnenuntergang
21. エピローグ Ausklang
22. 夜 Nacht

指揮・芸術監督／佐渡 裕 管弦楽／兵庫芸術文化センター管弦楽団

※演奏時間は目安です。前後する可能性がありますので、予めご了承ください。

※本公演に休憩はございません。

Streaming+で9月20日(日)の公演を配信します。料金:1,000円(税込) アーカイブ配信:9月27日(日)11:59PMまで

視聴チケットの購入・詳細は [イープラス](#) [佐渡裕](#) [アルプス交響曲](#) | |

PROGRAM NOTE

小味淵 彦之(音楽学、音楽評論)

リヒャルト・シュトラウス(1864-1949)というと、オーケストラファンの皆様には、「ドン・ファン」「ドン・キホーテ」「英雄の生涯」など、壮麗な響きが魅力的な交響詩の数々が頭に浮かぶことでしょう。「ツァラトゥストラかく語りき」の冒頭部分は、映画「2001年宇宙への旅」で使われて有名になりました。ただし、これは一つの限られた側面です。交響詩を手がけたのは30歳代までで、40歳代以降には充実したオペラの創作が続きました。「サロメ」「エレクトラ」で聴くことのできるゴージャスな響きは、交響詩の作風の延長線上になりますが、続く「ばらの騎士」で退廃的な魅惑の世界に方向転換し、最終的には15作のオペラを残しています。200曲以上ある歌曲も忘れることができません。

《アルプス交響曲》は1915年(51歳)2月に完成します。1911年から構想自体は進められていましたが、1914年から翌15年にかけての3ヶ月余りでスコアを書き上げています。少年時代のツークシュピッツェ(東アルプス山脈に位置する標高2962mのドイツ最高峰)登山をもとに、この山を見上げるガルミッシュの山荘で取り組まれました。ドレスデン宮廷歌劇場管弦楽団の演奏とシュトラウス自身の指揮によって、1915年10月28日にベルリンで初演されます。作品の系譜としては、交響詩と同じカテゴリーに入れることもできると思いますが、若干の傾向は異なっています。この時期のシュトラウスは、数々の名声を手に入れた大作曲家として内外に知られた存在でした。当時シュトラウスは、プロイセンの宮廷楽長であり、ベルリン宮廷歌劇場の音楽監督を務めています。オペラの初演がドレスデンで続いていて、この作品もこの地での演奏になると思いきや、オルガンが曲の編成に含まれていて、そのために演奏会場には、壮麗なオルガ

ンがあったベルリンの旧フィルハーモニー（第二次世界大戦で焼失）が選ばれました。

《アルプス交響曲》はとにかく編成が大きいのです。100名を超える4管編成の大オーケストラが必要で、ホルン8本の内4名はワーグナー・チューバへの持ち替えがあります。金管楽器による「バンダ」（舞台裏で演奏する別働隊）も用意されました。いくつかの特徴的な楽器が導入されています。風の音をおこすウインドマシン（18. 嵐の前の静けさ、19. 雷雨と嵐、下山）。これは、すでに《交響詩「ドン・キホーテ」》でも使われました。サンダー・マシンは、その名の通り雷鳴を響かせるためのものなのですが、音自体というよりも、大きな鉄のシートが吊るされて、それがたった2小節と少しだけ震わされ、視覚的要素も重要です（19. 雷雨と嵐、下山）。牧場の牛の首に巻き付けられた鈴が原形のカウベルは、マーラーの交響曲でもおなじみ（9. 山の牧場）。また、オーボエ属の楽器でいわば「バス・オーボエ」であるヘッケルホーンは、ファゴット製作者として著名なヘッケルに、かつてシュトラウスが特注した楽器です。

シュトラウスは、オーケストラで描けないものはないと豪語しました。牛が鳴き、鳥がさえずる牧場の風景（9. 山の牧場）、まるで水滴が見えるような水の描写（5. 小川に沿っての歩み 6. 滝 ほか）、雷や豪雨の克明な再現（19. 雷雨と嵐、下山）など、作品のそこかしらに、自然の見事な描写が音で表現されています。それでは《アルプス交響曲》は単なる音で風景を描いたスペクタクル絵巻なのでしょうか。確かに作品には、日の出から日没までが、登山者が山に登って下山する様子に重ねられ、22の細かな標題が付けられています。ただし作品に触れてみると、その音楽は単なる風景描写だけでなく、訴求力が音に宿っていることが感じられます。実は作品には「反キリスト者」というテーマが込められていることを、

シュトラウス自身が明らかにしています。これはニーチェの思想に基づくものであり、カトリック教会の権威を笠に着たカテゴリーに収まらない者を排除する横暴へ抵抗する想いが込められたとされます。ただし、社会的な立場を自覚していたシュトラウスは、こうしたテーゼを公にすることはありませんでした。

音楽的にはいくつかの動機（モチーフ）が実に巧妙に絡み合いつつ展開され、約50分にわたって全曲が切れ目なく演奏されます。冒頭の〈1. 夜〉で下行する音型が「夜の動機」、続いて金管楽器であらわれるハーモニーの連鎖が「山の動機」です。〈2. 日の出〉の冒頭で壮大に鳴り響くのが「太陽の動機」。〈3. 登り道〉の冒頭から一歩ずつ踏みしめるように低弦から上行音型で示されるのが「山登りの動機」で、ホルンとトロンボーン、続いてトランペットとのユニゾンによって勇壮なリズムであらわれるのが「岸壁の動機」となります。どこをとってもシュトラウスの音楽が持つエッセンスが満載の作品です。オーケストラが豪快に鳴らされる醍醐味と、途切れることなく精妙に連なる和声の色合いの変化を心ゆくまでお楽しみください。

楽器編成

フルート4（ピッコロ持替2）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、ヘッケルホーン、クラリネット3（バス・クラリネット持替）、E♭クラリネット、バスーン4（コントラ・バスーン持替）、ホルン8（ワーグナー・チューバ持替4）、トランペット4、トロンボーン2、バス・トロンボーン、コントラバス・トロンボーン、チューバ2、ティンパニ2、大太鼓、シンバル、サスペンド・シンバル、タムタム、ウインドマシン、サンダーシート、スネア・ドラム、グロッケンシュピール、トライアングル、スイスカウベル、チェレスタ、オルガン、ハーブ2、弦楽5部

※バンダ：ホルン6、トランペット2、トロンボーン2

